パプアニューギニア，ウェワクの移住者集落

田　島　康　弘

(1992年10月15日　受理)

Migrant Settlements in Wewak, Papua New Ginea

Yasuhiro TAJIMA

To study the current trend of P. N. G. society I examined the urbanization process of Wewak. From the immigrants of three selected settlements I obtained information through a questionnare covering their immigration process, thier urban settlement life and the relation to their home villages. Material from government offices and research institutions was also used. The followings are a summary of results.

1) Wewak is the fifth city in population in this country, and a local center dislike to Port Moresby and Lae, because most migrants of Wewak have come from East Sepik Province.

2) Most of the immigrants had lived as subsistence farmers in their home villages. but over half of them had experienced monetary economy through working away from home.

3) lmmigrants pay land rent to the landlord or government. The amount of rent paid depends on the settlement they live in. As some immigrants cannot find work, they are unable to pay rent on this land.

4) Their principle of life is communal. They marriage at home villages, and about 80 percent of them select their partners from the same villages as themselves. They want to live in their home villages in the future.

5) Many of them hope to manage a small shop in the future, although some respondants hope to live by carving or fishing in their home villages. It seems to me that the society of this country moves in a contradiction between communal elements and monetary ones.

第1章　研究目的

本研究は，筆者が1991年11月から12月にかけてパプアニューギニアで行った調査[1]のうち，ウェワクでの調査結果について報告するものである。ラエにおいてもほぼ同様の調査を行ったが，これ

については別に報告した[2]。

先に筆者は1989年にも，パプアニューギニアの都市の移住者集落に関する調査を行い，その結果を報告した[3]が，都市集落をめぐる諸現象を通じて，この国の社会の基本的特色や本質を把握しようとする，研究の基本的な考え方や調査の目的については変っていない。また，研究の方法についても，前回の調査と比較する上からも，あえてほぼ同様の調査を行った。

従来から行なってきた調査全体の総括を本報告で行う予定はないが，他との比較でとくにウェワクに特徴的な点については，当然考察の対象の1つとなるだろう。

以下，第2章ではウェワクの概観および戦後における移住者の流入と移住者集落の形成過程について扱い，第3章では調査方法や調査対象集落について概説したあと，第4章で調査の結果を述べ，第5章でまとめを行なうとともに，簡単な結語を述べたい。

第2章　ウェワクにおける移住者集落の形成過程

1.　センサスによる概観

1980年センサスによるウェワクの人口は，パプアニューギニア人19,142人，外国人748人で，合計19,890人であり，この国で5番目に人口の多い都市である。1966年には8,945人であったのと比べると，14年間に2倍以上に増えたことになる。1990年センサスの結果は入手し得ていない[4]が，移住者集落の居住者だけでも約46,000人とも推定されており[5]，1980年以降も移住者が急増していることはたしかであろう。

つぎに，センサスから1980年に居住する人々のうち，外国人748人を除いた残りの人々の出身地を多い順にみると，東セピク74.2%，西セピク7.0%，マダン2.8%，モロベ2.2%などとなり，両セピクなかんずく東セピク出身者が圧倒的に多いことがわかる[6]。すなわち，ウェワクの居住者はもっぱら東セピク出身者によって占められていることになる。

2.　移住者の流入と移住者集落の形成

戦後におけるウェワクへの移住者の流入過程は，次の3つの時期に区別することができよう。

第1期は戦後の荒廃から復興を目ざした時期で，その再建活動が外部からの移住者を引きつけたのである。

第2期は主に1950年代で，ウェワク居住者は商品作物の栽培のため，他地域からの移住者との間で居住地，共同作業，分配等について契約を結んだ。これにより移住者が流入した。Mary Talor Huberは，1958年に存在した20の移住者集落のうち，16～17がこうした契約によって存在した集落であったとしている[7]。

しかし，この時点においても，まずはじめに契約があってそれから移住者がやって来るというよりも，とにかく移住して来た人達が居住のために既存の居住者（＝土地所有者）と契約を結んだと

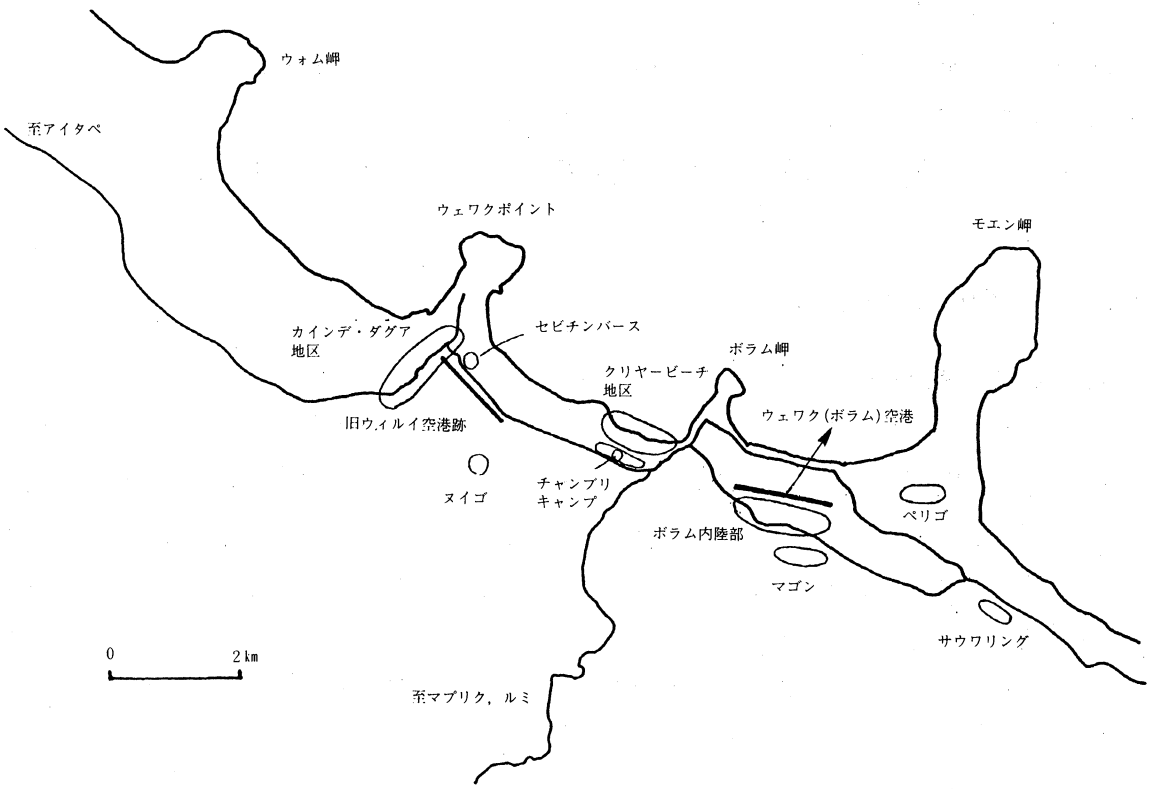
いうことの方が実態であったことを，彼女も同時に指摘していることに注意すべきであろう。栽培されていた作物は，ココナツ，コーヒー，ピーナッツなどであったが，作物栽培以外に，道路の建設や維持に関する契約を行う場合もあった。

第３の時期は1960～70年代から現在までの移住者が急増した時期である。この期の移住者の中には，土地所有者と正式に契約する場合もあったが，多くの場合は正式の契約は行われていない。しかし，この場合でも地主に対しては地代を現金または品物で支払ったり，地主の共同体の土地収益諸労働に対する協力を行ったりすることが期待されている。

また，この第３の時期を，政府による集落改良計画[8] が開始された時期である1984年以前と以後とに区別することもできよう。

3.　移住者集落形成の地域的展開

つぎに，主として第３期の移住者集落形成の地域展開についてみよう。1960年代にウェワクの３つの地域で移住者集落の形成がみられた（第１図）。



第１図　ウェワクの移住者集落

その１つは，カインデ・ダグア地区である。この地区はウェワクの中心であるウェワク・ポイントに近く，1950～60年代の都市建設に伴って，50年代にガルフ地方から建設技術者（大工）が入り込み，彼等とセピク諸地域（カバイバス，ヤンゴル，ドレイキキール，ルミなど）からの移住者との協力で都市建設[9] が進められ，このうちのセピクからの移住者が住みついたと言われる。

第2の地区は東方のクリヤビーチ地区で，この地区の住民は1)セピク川流域からの人々[10]，2)東方沿岸部および島嶼部からの人々，3)ウェワク背後の山地部のヤンゴルからの人々の3種からなっている。土地はバビアックおよびクレメンディングが所有しており，移住者達は彼らから土地を借りている。

第3の地区はさらに東方のボラム内陸部で，ここの居住者の大部分はセピク川流域からの人々であるが，彼等の一部はその後，カトリック教会が地主のクレメンデイングから土地を購入し，住宅地形成を計画していたヌイゴに移っている。

以上のほか，1970年頃には次の4つの地区でも移住者集落の形成がみられた。

1)　クリヤービーチ背後の湿地帯。ここは西セピクからの人々が多いと言われる。

2)　マゴン周辺(ボラム空港南側の空港背後地)。セピク川流域からとマプリクからの人々が多い。

3)　ペリゴ地区（エモン岬の背後地）

4)　サウワリング地区（最東方）

また,1970年代には前記3移住者集落の人口増加も顕著となり,とくにダグア道路周辺とクリヤービーチ周辺で増加が著しかった[11]。

その後も移住者集落の拡大は続き，既存の移住者集落各地の拡大とともに，西方のアイタペ方面への道路沿いなどにも，新たな移住者集落が形成されている。

なお，1984年には政府による最初の移住者集落の改良計画が，ヌイゴで開始された。

第3章　調査の概要と調査集落

1.　調査の概要と調査方法

調査は我々がウェワクに滞在した1991年11月21日から27日にかけて行われた。筆者は集落調査に入る前に，先ずNHC（National Housing Corporation）[12]を訪問し，調査に対する協力を依頼した。次いで，彼等の協力の下にウェワクの都市計画を担当している「土地・都市計画局」を訪問し，移住者集落の状況の説明や1万分の1の都市集落図の入手などを行った。また，東セピクの統計局ではセンサス地図等の資料を入手した。

さらに，ブルーノ・カナウィ氏[13]の協力の下に，車で市内の移住者集落の各地をまわり，その概況を把握した。

調査対象集落としては，1)諸地域からの出身者が混合しており，集落改良計画が行われたヌイゴ。2)同地域出身者のみで構成される移住者集落の典型的なものの1つで，クリヤービーチ背後に位置するチャンブリ・キャンプ（以下，チャンブリCと略す)。3)各地からの出身者からなる混合した集落でダグアに近いセビチンバースの3つを選択した。

集落選定理由は，以上述べた特色を考えたことの他に，調査上の便宜的な理由もあった。すなわち，ヌイゴにはラエの工科大学で紹介された前述のブルーノ・カナウィ氏がリーダーとして活躍し

ていたことがあり，また，セビチンバースについては，ヌイゴの調査ができない可能性があった[14]ため，その代りとして選択した経過もある。なお，調査に際しては，ヌイゴではリーダーのカナウィ氏に，またヌイゴとチャンブリではNHCの所長ほか2人の職員の方々の協力[15]を得ている。

具体的には，筆者が作成した2種類の調査票に基ずいて，1)各集落のリーダーに対する，20項目に渡る面接・ききとり調査，2)各集落内の10名程度の世帯主に対する，26の項目に渡る面接・ききとり調査を行った。調査は被調査者に「若者小屋」やリーダーの家の近くに来ていただき，ききとりするケースが主であったが，筆者が被調査者の家を訪問してききとりを行う場合もあった。

2. 調査対象集落の概要

1) ヌイゴ

ヌイゴはウェワクでは唯一の政府により集落改良計画が実施された集落で，直線的道路の両側に家が並んで建てられており，土地測量が行われ，上水，下水も整備されている。居住者区割は348ブロック，すなわち348戸[16]であり，人口は2,000人以上と言われる[17]。これら住民の大部分は東セピク各地から来ているが，とくにアンブンティ周辺から来た者が多く，ヌイゴ集落内で出身集落毎に6つか7つのかたまりをなして居住していると言われる[18]。

1961～2年頃最初の居住者が住みつき，60年代中頃に人口が急増した。当時のこの土地の所有者はカトリック教会で，60年代にこの教会により集落改良計画が進められたが，土地条件の悪さ[19]などのため，なかなか進まなかった。1984年から政府による集落改良計画が実施され，前述したインフラストラクチャーが整備された。

地代が政府に対して支払われており，従来は1戸当り年間18キナ[20]であったが，最近これが50キナに引上げられ，以前でさえ地代が支払えない者もいた状況がさらに悪化し，国家に対して数千キナの負債をかかえている。

集落費については，出身者集団によってはいくらかづつ徴集しているところもあるが，集落全体としては徴収していない。しかし，集落として自分達が経営するマーケットを持っており，ここからの収入が集落の諸経費に当てられている。

このほか，最大の祭りである「シンシン」は集落が組織するが，おどりなどの行動単位は出身者集団であること，教会にも墓はあるが，死者が出たときは普通は郷里へ運ぶことなどのこともつけ加えておきたい。

2) チャンブリキャンプ

チャンブリCはクリヤービーチ背後の湿地帯に形成された，いくつかの移住者集落のうちの1つである。名前の示すとおり，ここの住民の出身地はセピク川中流域にあるチャンブリ湖の近くで，調査時点では42戸が居住していた。1戸当りの平均人数を今仮にヌイゴと同じく6.5人と仮定すると，約270人ほどの集落ということになる。集落内では「ノウィ」と「ニアメイ」の2つのクランがあり，前者が14戸，後者が28戸である。

1966年に，最初の居住者がこの地に住みついたと言われ，その後次第に来住者が増えた。土地の所有者は背後の斜面に以前から居住していたクリヤービレッジの人々で，彼等に対して移住者達は1戸当り月に3キナ，年間36キナを地代として支払っている。

元来，セピク川流域の住民は木彫りの技術を持っているが，チャンブリCの住民はその技術においてとくにすぐれており，有名な「チャンブリマスク[21]」の製作と販売を行っている。このほか，同様の手作業で「バスケット[22]」を生産・販売しており，木彫りは男性，バスケットは女性の仕事となっている。

集落費については，特別に必要なときには集めるが，定期的な徴収はしていない。

3)　セビチンバース

セビチンバースは，ヌイゴの北方，旧ウィルイ空港跡地周辺に存在するいくつかの集落の中の1つである。家の数は53戸（約350人）で，これを出身地別にみると，セピク川中流域のティンボリが15戸，マプリク南方のワウラが20戸，マプリクが3戸，それに西セピクのルミが15戸であって，各地からの出身者が「混合」してできた集落である。

1971年に最初の移住者がこの地に住みつき，その後除々に戸数が増加していった。

地代は土地所有者であるボイケンの人々に，1戸当り年間10キナを支払っているが，中には地代を支払えない者もいる。集落費は徴集していない。

以上みたように，1)集落改良計画実施の有無でみると，ヌイゴは実施されたが他の2つは実施されていないこと，2)出身者集団でみると，チャンブリCはほぼ同一の集落出身者からなるのに対し，他の2つは各地の出身者が「混合」していること等の整理ができよう。ただし，「混合」と言っても，その内部ではいくつかの出身者集団に分けられることについては既に指摘した通りである。

3.　同地域出身者の都市居住形態

同一地域出身者が，ウェワク内で住む場合，一カ所のみにかたまって住むとは限らず，むしろ数カ所に分散して居住することの方が一般的な様である。一つの例として，西セピクのルミ出身者の場合をここに示そう。全体で150戸程がウェワク内に居住しているが，具体的には次の7カ所に分散居住している。1)マンゴロキャンプ（カインデ北隣）50～60戸，2)マパウ（カインデ東隣）30戸，3)ウィルイ（旧ウィルイ空港南側）17～18戸，4)セビチンバース（旧空港北側）15戸，5)ヤワロサ（西方）15戸，6)コモックス（旧空港北側）10戸，7)ボラム（東方，現空港隣）6戸[23]。

この理由についてはよくわからないが，一方では集住の傾向を強く示すと同時に，他方ではこのような数カ所への分散居住も一般的なようである。ただ，上のルミ出身者の場合，見方によっては5)のヤワロサと7)のボラムを除くと，他のほとんどすべてはカインデおよび旧空港地区周辺に集中していると見ることもできよう。とすると，圧倒的多数は一カ所集中とみられなくもない。

第4章　調査結果

調査項目は26の小項目にわたっていたが，今これを整理するに当り，1. 被調査者の属性，2. 移住のプロセス，3. 移住前の状況，4. 現在の生活，5. 郷里との関係，6. 採来について，の6つの大項目にまとめて述べることにしたい。

1.　被調査者の属性

既述のように被調査者は全員世帯主であり，性別ではヌイゴの1人が女性である他はすべて男性である。ここでは，彼等の生年（年齢）と誕生地について示しておきたい。

1)　生年（年齢）

全体としては1930年生まれ，すなわち50代が最も多く，全体の約半数を占めている(第1表)。次いで30代，さらに40代の順となっており，比較的高年齢者の比重が高かった。集落別ではとくにヌイゴでこの傾向が強いが，これは，この集落の相対的古さやボラム内陸部からの移転者が多かったこのなどによるのであろう。

第1表　被調査者の生年

生年	N	C	S	計	%
1926～30	1		1	2	7.1
31～35	2	3		5	17.9
36～40	5	3	2	10	35.7
41～45		1		1	3.6
46～50	1		2	3	10.1
51～55	1	1	2	4	14.3
56～60			2		7.1
61～65					
66～70			1	1	3.6
計	10	10	8	28	100.0

注）NはNuigo, CはChambri Camp, SはSevitimbersの略

2)　誕生地

各集落居住者の出身地に関する全体状況については既にみたが，被調査者のみについて具体的にみると，ヌイゴでは，アンゴラムの1人以外はすべてセピク川中流域から，チャンブリCでは全員がチャンブリから，セビチンバースでは西セピクのルミが半数と多く，セピク川流域も少くないことなど，集落毎の特色がやはり目立っている（第2表)。これらの傾向は，先の集落全体の傾向とほぼ比例すると言えようが，ただ，ヌイゴではアンブンティ周辺というよりも，被調査者の方はアンブンティから下流域に向う地域の出身者が多いこと，また，セビチ

第2表　被調査者の誕生地

	N	C	S	計	%
Chimbien	3			3	10.7
Gaikorobf	2			2	7.1
Angoram	1		1	2	7.1
Tegawi	1			1	3.6
Yamok	1			1	3.6
Wengi Mangua[1]	1			1	3.6
Aunalup[2]	1			1	3.6
Chambri		10		10	35.7
Japanaut			1	1	3.6
Sengo			1	1	3.6
Maprik				1	3.6
Lumi[3]			4	4	14.3
計	10	10	8	28	100.0

注1）この地名は地図上では見らず，Timbimanguaのことかも知れない。とするセピク川中流域である。
2）この地名も地図上では見当らないが，他の諸事情からセピク川流域と推測した。
3）Lumiだけが西セピクであり，他はすべて東セピクである。
4）ChimbienからSengoまではセピク川中下流域の地名であり，この地域の住民は一般にリバー・ピープルと呼ばれている。

ンバースではマプリク地域の出身者が被調査者には少ないことなどが異なると言えよう。

2. 移住のプロセス

ここでは，移住時点での基礎的な事実やその際の諸問題について，以下の8項目に渡って整理した。

1)　いつ移住したか（移住年）

全体としては1960年代が最大で，70年代がこれに次ぎ，両者で全体の75%を占めている（第3表）。これを集落別にみると，ヌイゴでは1950年代後半から60年代前半に，チャンブリCでは60年代後半から70年代に，セビチンバースでは70～80年代に多いという傾向が示されている。

第3表　移住年

年	N	C	S	計	%
1941～45	1			1	3.6
46～50					
51～55					
56～60	3	1		3	10.7
61～65	4		1	5	17.9
66～70	2	5	1	8	28.6
71～75		2	1	3	10.7
76～80		3	2	5	17.9
81～85			2	2	7.1
86～			1	1	3.6
	10	10	8	28	100.0

2)　どこから来たか（前住地）

第4表は，誕生地を示した第2表とかなり似ているが，比べてよくみると，チャンブリの居住者でマプリクやブーゲンビルから来た者がいることなど，多少の違いもある（第4表）。しかし，大部分が東セピク，中でも，リバーピープルと呼ばれているセピク川流域からの人々であることに変りはない。

第4表　前住地

前住地	N	C	S	計	%	
Chimbian	2			2	7.1	71.4
Gaikorobi	2			2	7.1	
Angoram	1		1	2	7.1	
Wengi Mangua	1			1	3.6	
Yamok	1			1	3.6	
Tegawi	1			1	3.6	
Aunalup	1			1	3.1	
Chambri		8		8	28.6	
Japanaut			1	1	3.6	
Sengo			1	1	3.6	
Maprik		1	1	1	7.1	
Lumi			4	4	14.3	
Manus[1)]	1			1	3.6	
Bougainville[2)]		1		1	3.6	
計	10	10	8	28	100.0	

注1）Manus Province
　2）North Solomon Province

3)　なぜ来たか（来住理由）

来住理由をみると，仕事関係で来た者が全体の過半数を占めて最も多い（第5表）。これは当然であろう。むしろ，これ以外の理由が比較的多いことが注目され，とくにチャンブリCでこの傾向が強い。つまり，チャンブリCでは仕事以外の目的で来た者が多いという事であり，この理由は恐

らく，チャンブリのほとんどの人々が木彫りやバスケット作りの仕事の技術を既に持っているためではないかと思われる。

第5表　来住理由

理　由	N	C	S	計	%	
仕事を求めて	3	1	3	7	25.0	53.6
転　勤	3		1	4	14.3	
軍隊の仕事	2			2	7.1	
会社の歓誘		1	1	2	7.1	
病院にかかるため	1	2		3	10.7	
学校に入るため	1	1		2	7.1	
父・兄弟に会うため		1	1	2	7.1	
いとこがさそったので		1		1	3.6	
都会に住みたかった		1		1	3.6	
親につれられて		1		1	3.6	
ブーゲンビルの危機で		1		1	3.6	
農業につかれたため			1	1	3.6	
不　明			1	1	3.6	
計	10		8	28	100.0	

4)　ウェワクに居住していた親戚の有無

つぎに，来住時に，親戚など頼れる人がウェワクに既に住んでいたか否かについてみたが，親戚がいない者は1割程度にすぎず，ほとんどの者には親戚がいた（第6表）。中でも兄弟がいる場合が最も多い。

第6表　来住時に居住していた親戚

親戚等	N	C	S	計	%
父　母		1	2	3	10.7
兄　弟	7	6	1	14	50.0
その他の親戚	2	3	3	8	28.6
友　人	1		2	3	10.7
計	10	10	8	28	100.0

5)　来住時の宿

来住者にとって当面する最大の問題の1つである宿泊した場所について尋ねた結果をみると，「兄弟の家」が最も多く，次いで「その他の親戚の家」となっていて，表6表とほぼ同様の傾向が示されている（第7表）。

第7表　来住時の宿

宿	N	C	S	計	%
父母の家		1	2	3	10.7
兄弟の家	7	3	1	11	39.3
その他の親戚の家	1	4	3	8	28.6
友人の家	1		2	3	10.7
自分の家	1	1		2	7.1
若者小屋		1		1	3.6
計	10	10	8	28	100.0

6)　仕事探し

宿泊と並んでもう1つの基本的な問題である仕事をどう探したかについてみると，既に仕事を

もっていた者が26.9%いるが，これ以外では自分個人の努力で探すことが多く（57.7%），このうちのかなりの者（42.3%）が仕事を見出している。人に頼んで仕事を見つけもらうケースは4件（15.4%）しかなく，意外に少ないと言える（第8表）。

第8表　仕事探し

仕事探し	N	C	S	計	%
転　勤	3		1	4	15.4
大工・塗師として働いた	2	1		3	11.5
求人に応じた		1	2	3	11.5
自分で探して得た	4	2		6[1]	23.1
手紙を書きアプローチして得た			2	2[2]	7.7
自分で探したがなかった		2	2	4	15.4
兄に依頼した	1		1	2	7.7
役人に依頼した		2		2	7.7
小　計	10	8	8	26	100.0
不　明		2		2	
計	10	10	8	28	

注1）こうして得た実態は店員3，自動車会社1，ウェワクホテル1，港湾労働者1である。
2）これらはTowae TimbersとSepik Timbersであり，いずれも製材会社である。

7)　来住時の同伴者

来住時の同伴に関する形態をみると，「1人」の場合は35.7%と意外に少ない。2人以上のうちの大部分は「妻子」とともにであり，家族での移住という形態はポートモレスビーやラエではむしろ少数だったので，ウェワクの特色と言えよう（第9表）。ただ，ヌイゴでは「1人」で来たケースが多い。

第9表　来住時の同伴者

同伴形態	N	C	S	計	%
1人で	6	3	1	10	35.7
妻子と	4	4	6	14	50.0
その他の家族と		2		2	7.1
親戚と		1	1	2	7.1
計	10	10	8	283	100.0

8)　来住時の問題

来住時に彼等が直面した問題について尋ねたところ，「なし」との答が8割近くを占めて最も多かった（第10表）。少数ではあったが，問題としてあげられたのは，「住む家がなかった」，「病院に入れなかった」，「仕事がなかった」などであった。

第10表　来住時の問題

問　題	N	C	S	計	%
な　し	7	8	7	22	78.6
家がなかった	3[1]			3	10.7
病院に入れなかった		1		1	3.6
息子と住めなかった		1		1	3.6
仕事がなかった			1	1	3.6
計	10	10	8	28	100.0

注1）「水害にあった」を併記したものがいた。

3. 来住前の状況

来住以前の状況として，1)以前の村での仕事，2)以前の村での移住経験の2つについて尋ねたので，これについて整理した。

1) 村での仕事

村での仕事についてみると，自給的「農業」を行っていた者が64.3%と最も多い。当時は学生や子供であって仕事をしていなかった者を除くと，その比率は圧倒的に高くなる（第11表）。つまり，村ではほとんどの者が，この国の農村部で一般的な自給自足的生活をしていたことになる。

第11表　村での仕事

仕　事	N	C	S	計	%
自給的農業	6	4[1]	8[2]	18	64.3
郵便の仕事	1			1	3.6
カトリック教会		2		2	7.1
クリニック		1		1	3.6
ミュージシャン		1		1	3.6
なし(学生・子供)	3	2		5	17.9
計	10	10	8	28	100.0

注1）漁業を行うものを含む
　2）カヌー，家づくりを兼ねるものを含む

2) 移住経験

移住経験については，多少詳しくふれてみたい。すなわち，①移住回数，②移住先，③仕事の内容，④移住期間の長さ，⑤移住の時期の5点についてみておきたい。

①移住回数

移住回数をみると，移住したことのない者が半数近くいるが，半数以上の者が移住経験を持っており，その中では2回が最も多い（第12—1表）。集落別特色としては，セビチンバースで，移住経験者がとくに少ないと言える。

第12—1表　移住回数

回数	N	C	S	計	%
な　し	2	4	7	13	46.3
1　回	4			4	14.3
2　回	4	4		8	28.6
3　回		1	1	2	7.1
4　回		1		1	3.6
計	10	10	8	28	100.0

②移住先

第12—1表から，移住の延べ回数は30回となる。この30回についてその移住先をみると，ラバウルが最も多く，以下，マダン，マヌス，ラエなどの順になっており，以上で全体の3分の2に達する（第12—2表）。すなわち，ラバウルはやや遠いが，

第12—2表　移住先

	N	C	S	計	%
ラバウル	4	5	1	10	33.3
マダン	1	2	1	4	13.3
マヌス	3			3	10.0
ラ　エ	2	1		3	10.0
ワ　ウ	1		1	2	6.7
ブーゲンビル	1	1		2	6.7
ブロロ		1		1	3.3
マウントハーゲン		1		1	3.3
ポートモレスビー		1		1	3.3
カビエン		1		1	3.3
マリエンベルク		1		1	3.3
アンゴラム		1		1	3.3
計	12	15	3	30	100.0

これ以外はウェワクに近い都市への移住が多いと言えようか。

③仕事の内容

移住先での仕事の内容をみると，コプラを中心とする「プランテーション労働」が3分の1以上を占めて断然多い。ついで「スーパーの店員」，「鉱山や炭坑の鉱夫」，「政府の仕事，役人」の3つが多く，さらに「大工などの建設」が続いている。全体的にはプランテーション労働や鉱夫などの原料・食料型産業での仕事が多いと言えようか（第12—3表）。

第12—3表　仕事の内容

仕　事	N	C	S	計	%
プランテーション(コプラ)	4	3	1	8	36.4
スーパー店員	2	1		3	13.6
炭坑・鉱山	1	1	1	3	13.6
政府の仕事・役人	1	2		3	13.6
大工・建設	1		1	2	9.1
林業		1		1	4.5
ホテル		1		1	4.5
石油会社		1		1	4.5
小　計	9	10	3	22	100.0
不　明	3	5		8	
計	12	15	3	30	

④移住期間の長さ

移住期間の長さをみると，1年以内が56.6%，2年以内では83.6%であり，2年以下が大部分であることがわかる（第12—4表）。

第12—4表　移住期間

期　間	N	C	S	計	%
6カ月程度		5	2	7	23.3
1年　〃	6	3	1	10	33.3
2年　〃	2	6		8	26.7
3年　〃	2			2	6.7
4年以上	2	1		3	10.0
計	12	15	3	30	100.0

⑤移住の時期

いつ移住の経験をしたかをみると，1950年代が半数近くで最も多く，次いで60年代，70年代，40年代の順となっており，比較的早い時期から移住を行っていたと言える（第12—5表）。

第12—5　移住時の時期

時　期	N	C	S	計	%
1940年代	3			3	11.1
50　〃	5	6	2	13	48.1
60　〃	3	2	1	6	22.2
70　〃		4		4	14.8
80　〃	1			1	3.7
小　計	12	12	3	27	100.0
不　明		3		3	
計	12	15	3	30	

以上，移住経験についてやや詳しくみたが，移住回数は「なし」を除くと，1～2回が多く，行先はラバウル，仕事はプランテーション労働で，期間は半年～2年程度，そして比較的早い時期から移住を行っていたという平均的な姿が浮かんでくる。このうち，期間が2年以内ということは，「移住」というよりむしろ「出稼ぎ」に近いと言えるかも知れない。

4. 現在の生活

移住者集落での生活のうち，とくに職業と家族の問題を中心に捉えてみたい。

1) 現在の職業

職種では，全体として「木彫」の仕事が最も多いが，これはほとんどチャンブリCに集中している（第13表）。この他では，セビチンバースで「政府の仕事」がやや多い他は多様であると言えよう。また，ヌイゴでは現在，仕事のない者がとくに目立っている。

2) 労働時間

週40時間以上働く者を完全就業者とすると，その割合は50%にすぎず，16時間以内の者も半数近くを占めており，仕事のなさ，不安定さが示されている（第14表）。

3) 子供の数

全体として子供数が1～5人の間に全体の71.5%の世帯が集中しているが，「12～13人」というとびぬけて多い家族が一部に存在し，これはとくにヌイゴに多い（第15表）。

4) 結婚年

被調査者の結婚した年についてみると，全体的には

第13表　現在の職業

職　業	N	C	S	計	%
木　彫	1	8		9	32.1
政府の仕事			3	3	10.7
大工・建設	1			1	3.6
港湾労働	1			1	3.6
PMVトラック[1]	1			1	3.6
スクラップ販売			1	1	3.6
卸売り会社			1	1	3.6
臨時・パート			3	3	10.7
な　し	6	2		8	28.6
計	10	10	8	28	100.0

注1）PMVとはPublic Motor Vehicleの略である

第14表　労働時間

期　間	N	C	S	計	%
40時間以上	3	8	3	14	50.0
32～40			1	1	3.6
24～32			1	1	3.6
24～32			1	1	3.6
16～24					
8～16	1		4	5	17.9
8時間未満	6	2		8	28.6
	10	10	8	28	100.0

第15表　子供の人数

人　数	N	C	S	計	%
12～13	3		1	4	14.3
10～11					
8～ 9					
7	1			1	3.6
6		1	1	2	7.1
5	2	2	1	5	17.9
4	1		2	3	10.7
3	1	4		5	17.9
2	1	2	1	4	14.3
1	1	1	1	3	10.7
0			1	1	3.6
計	10	10	8	28	100.0

1950年代～70年代にかけての時期に多くなっており，集落別ではヌイゴが他より早い傾向がみられる（第16表）。

5)　結婚の場所

結婚した場所をみると，被調査者自身の出身地が80.8%と大部分を占めていて，ウェワクなどはきわめて少ない（第17表）。このことは，彼等の集団生活の基盤が出身の村にあることを示していると言えよう。この点については3集落とも同様の傾向である。

6)　妻の出身地

これも，「夫と同じ村」が8割以上と大多数を占めており，第17表と類似の傾向であると言えよう（第18表）。ただ，少ないながら19.2%の者が，他村や他地域の者と結婚していることにも注目しておきたい。

5.　郷里との関係

出身地との結びつきの強さを測るため，彼等の帰村状況や郷里との連絡状況について把えてみた。

1)　郷里にいる人

まず，郷里にいる被調査者にとって最も重要な人に

第16表　結婚年

結婚年	N	C	S	計	%	
1946～50	1			1	3.6	
51～55	1		1	2	7.1	25.0
56～60	3	1	1	5	17.9	
61～65	2	4	2	8	28.6	32.2
66～70	1			1	3.6	
71～75	1	2	2	5	17.9	28.6
76～80	1	1	1	3	10.7	
81～85		1		1	3.6	
86～		1		1	3.6	
未　婚			1	1	3.6	
計	10	10	8	28	100.0	

第17表　結婚の場所

場　所	N	C	S	計	%
自分の出身地	8	8	5	21	80.8
妻　の　〃	1			1	3.8
ウェワク	1	1		2	7.7
その他		1	1	2	7.7
小　計	10	10	6	26	100.0
未　婚			1		
不　明			1		
計	10	10	8	28	

第18　妻(夫)の出身地

出身地	N	C	S	計	%
夫と同じ村	8	7	6	21	80.8
夫と異なる村[1]		3[2]		3	11.5
夫と異なる Province	1			1	3.8
外国人	1[3]			1	3.8
小　計	10	10	6	26	100.0
独　身			1		
不　明			1		
計	10	10	8	28	

注1）同じ Province 内である。
2）夫は3人ともチャンブリ，妻の2人はアンブンティ，他の1人はウェワクである。
3）世帯主は女性で，セピク川中流域出身，夫はオーストラリア人

ついて尋ねたところ，「兄弟」が最も多く，次いで「父母」であって，両者で8割をこえた（第19表）。すなわち，兄弟か親という最も近い血縁者が，たいてい郷里にはいるということである。

2)　帰村の頻度

帰村の頻度をみると，年に1～2回が半数近くを占めて最も多く，年1回以上をすべて合わせると75%となり，帰村の頻度はなかり高いと言えよう（第20表）。これを集落別にみると，ヌイゴに「帰ったことがない」など，やや全体とは逆の傾向がみられる。ヌイゴの被調査者はセピク川中流域に分散しており，交通の便の悪さの問題もここにはあるのかも知れない。

3)　仕送りの頻度

金品の仕送りの頻度をみると，年に1～2回が37.0%と最も多く，年1回以上をすべて合わせると59.3%と6割近くになる（第21表）。しかし，仕送りを「しない」者も29.6%とかなりおり，又ヌイゴに特に多い。第20

第19表　郷里にいる人

郷里の人	N	C	S	計	%
父　母	2	3	3	8	29.6
兄弟(姉妹)	7	4	3	14	51.9
その他の親戚		3		3	11.1
唯もいない	1		1	2	4.4
小　計	10	10	7	27	100.0
不　明			1	1	
計	10	10	8	28	

第20表　帰村の頻度

頻　度	N	C	S	計	%	
12回以上/年			2	2	7.1	75.0
7～11	1		1	2	7.1	
5～6	1	1		2	7.1	
3～4	1	1		2	7.1	
1～2	2	7	4	13	46.4	
1回/5～10年	1		1	2	7.1	
帰ったことがない	4	1		5	17.9	
計	10	10	8	28	100.0	

第21表　仕送りの頻度

頻　度	N	C	S	計	%	
7回以上/年			1	1	3.7	59.3
5～6		2		2	7.4	
3～4		3		3	11.1	
1～2	3	4	3	10	37.0	
2年に1回			1	1	3.7	
要求されたとき	1		1	2	7.4	
しない	6[1]		2	8	29.6	
小　計	10	9	8	27	100.0	
不　明	10	10	8	28		
計	10	10	8	28		

注1）「もってゆく」1名を含む

表ともあわせて考えてみると，ヌイゴの被調査者の一部で，郷里との結びつきが弱まっている傾向が指摘できるかも知れない。

4)　手紙の頻度

手紙の頻度でも，全体としては年1回以上が71.4%と多いが，出さない者も28.6%とかなりおり，これは，やはりヌイゴに多い（第22表）。これは前述の指摘をさらに裏づけるものと言えよう。

第22表　手紙の頻度

頻　度	N	C	S	計	%	
12回以上/年			1	1	3.6	71.4
7～11			1	1	3.6	
5～ 6		3	2	5	17.9	
3～ 4	2	3	1	6	21.4	
1～ 2	2	4	1	7	25.0	
な　し	6		2	8	28.6	
計	10	10	8	28	100.0	

6.　採来の意向

最後に，彼等の意識を把握する一環として，これからもウェワクに住み続けるのか否か，および将来の職業上又は生活上の希望は何かについて尋ねた。

1)　将来住みたい居住地

これに関する傾向ははっきりしており，85.7%の者が将来は村に戻りたい希望を持つという結果が出た（第23表）。とくに，チャンブリCでは100%がそうであり，村との結びつきが一部で弱まっていると思われたヌイゴでも，7割が村へ帰りたいとしている。移住者集落居住者の村との結びつきの全体的な強さを示す一つの事実と言うことができよう。

第23表　将来希望する居住地

居住地	N	C	S	計	%
村	7	10	7[1]	24	85.1
ウェワク	3		1[2]	4	14.3
計	10	10	8	28	100.0

注1）ただし，1人は仕事のある間はウェワクとしている。
　2）この1人は，地主が望まなければ，村へ帰るとしている。

第24表　将来の居住地の選択理由

	N	C	S	計	%
「村に帰りたい」理由					
ここが自分の土地でない		8		8	44.4
村は自分の地でホームだ	1	2	1	4	22.2
村でビジネスがしたい	1		1	2	11.1
ここには自分の家がない	1			1	5.6
皆の世話をしなければならない	1			1	5.6
年金が入り，生活してゆける	1			1	5.6
子供の教育で来たのだから	1			1	5.6
小　計	6	10	2	18	100.0
不　明	1		5	6	
計	7	10	7	24	
「ウェワクにいたい」理由					
家を所有している	2			2	
不　明	1		1	2	
計	3		1	4	

2)　居住地選択の理由

まず，「村に帰りたい」とする者の理由をみると，「ここは自分の土地ではない」や「村は自分の土地であり，ホームだ」など土地に関する理由が3分の2を占めており，これはとくにチャンブリCに圧倒的に多い（第24表）。実は，チャンブリCでは，土地をめぐって地主との間で問題が起き

ていることを調査を通して耳にしたが，そのことがここにも反映されているようだ。これ以外の理由は，かなり多様であると言えようか。

他方，都会のウェワクに住みたいとした者は少なかったが，その理由は「家があるから」であった。これはヌイゴの場合であり，フォーマルな都市計画が行なわれたことによる影響であろうか。

3)　将来の希望

仕事や生活面での将来の希望をみると，全体としては店を経営したいとする者が最も多く，ビジネス（これも店の経営をも含んだより広い事業と考えられる）を加えると半数近くなる（第25表）。次いで，「木彫の仕事」および「村で魚をとって売りたい」が14.3%で続く。これを集落別にみると，前者の小売店経営はヌイゴとセビチンバースで多く，後者はチャンブリCで多くなっていて，集落によるちがいがはっきりしている。

第25表　将来の希望

希　望	N	C	S	計	%	
小売店経営	6		5	11	39.3	46.4
ビジネス			2	2	7.1	
木彫の仕事		4		4	14.3	
村での魚獲と販売		4		4	14.3	
家，学校，教会の建設	2			2	7.1	
村での食料生産	1	1		2	7.1	
ラグビーの選手		1		1	3.6	
「なし」，「わからない」	1		1	2	7.1	
計	10	10	8	28	100.0	

注）以上の中に船の製作やPMVサービスをしたい等の併記もあったが省略した。

現金収入の獲得を目ざしているという点では，両者とも共通していると言えようが，チャンブリCの場合は，既存の技術や資源を生かそうとししている点に特色があり，より個性的な方向性を持つものと評価することができよう。

第5章　まとめと結語

本研究における主な内容を要約すると，以下のように整理できるであろう。

1)　ウェワクはパプアニューギニア第5の都市であるが，移住者集落内居住者のほとんどの者が東セピク内の各地の出身者であり，この点はラエやポートモレスビーと異なっている。

2)　ウェワクにおける移住者の流入には3つの段階があり，第1は戦後の復興期，第2は1950年代の契約移住期，第3は1960年代以降のフォーマルな契約なしに，大量の移住者が流入した時期である。

3)　ウェワク内には，3つの大きな移住者居住区がある。1つはカインデ地区周辺であり，2番目はクリヤービーチ地区周辺で，もう1つはボラム内陸部である。なお，ボラム内陸部の居住者

の一部がのちにヌイゴに移転した。

4)　各移住者集落とも，地代を国や地主たちに支払っているが，その額は50キナ（ヌイゴ），36キナ（チャンブリ），10キナ（セビチンバース）とまちまちで，一定していない。また，支払えないで借金がかさなったり，支払わない者がいるともいわれる。

5)　被調査者の来住時には，たいてい兄弟などの先住者がおり，はじめはそこに宿泊する。

6)　しかし，仕事は人に頼らずに自分の努力で探すことが多く，結果的には見出せない場合もある。

7)　村にいた時は，自給的「農業」を行っていた者が圧倒的に多く，また，ウェワクへ来る前にも「出稼ぎ的移住」の経験をしていた者が半数をこえている。

8)　現在の職業については，チャンブリキャンプでは木彫が中心であるが，これ以外は多様であり，失業者も少なくない。

9)　約8割の者が，自分の村で同村出身者と結婚しており，この比率はラエやポートモレスビーよりも高い。ただ，他村出身との婚姻が2割程あることも注目すべきであろう。

10)　帰村や手紙の頻度から，ヌイゴの一部を除いて，郷里との結びつきはきわめて強いと言える。

11)　将来は村に戻りたいとする者が圧倒的に多く（86%），ヌイゴでも基本的には同じ傾向であることから，村との結びつきの強さがここでも証明されている。また，これには土地問題による影響も大きい。

12)　チャンブリキャンプでは，技術や資源を持っており，これを生かした発展方向を望んでいるが，他では商店経営等の希望が強く，全般的には後者が一般的傾向のように思われる。

以上，12の項目にまとめて整理した。

最後に，結論的に述べるとすれば，経済的には，自給的経済構造（7）から現金収入の獲得をめざす貨幣経済的・経営的方向へのプロセスが進行している（4，6，8，12）が，他方，社会的には，共同体的社会関係が今なお強く残存しており（5，9，10，11），経済的プロセスの進行と共同体的社会関係の維持との予盾を軸に，この国の社会が動いていると言えるのではないかと思う。

謝　　辞

本研究を進めるに当り，National Housing Corporation の Mathew Narowen 氏，Augustin Bali 氏，Simon kull 氏，および Electricity Commission の Bruno Kanawi 氏には，資料収集や調査への協力の面で大変お世話になった。また，Development of Lands and Phisical Planning のJoe Mark 氏には，都市集落図などの提供を受けた。また，3つの調査集落の多くの方々にも筆者の面接調査に協力していただいた。これらの方々に厚く御礼申し上げます。

さらに，ラエの工科大学の故 Ramesh Manandhar 博士には，筆者の集落研究に対する様々なアドバイスをして下さった他，上述のウェワクでの協力者の紹介の面でも大変御助力をいただいた。

本小論を，故 Ramesh Manandhar 博士の霊前に謹んで献呈致します。

注

1) 鹿児島大学南方海域研究センター（鹿大南海研と略す）が組織した調査隊の一員として行った調査である。
2) 拙稿（1992）：New Migrant Settlement in Lae. 鹿大南海研，Occational Paper No. 23, pp 57-65.
3) 拙稿（1990）：ポートモレスビーの移住者集落。南太平洋研究11巻1号, pp 1-21.
拙稿（1991）：パプアニューギニア，ラエ市の移住者集落，鹿児島大学教育学部研究紀要42巻, pp 1-19.
4) 1991年11月段階では，統計局でまだ整理中であった。
5) Bruno Kanawi（1991）：National Committee for Urban Shelter（NCUS と略す）の東セピクの Provincial Report による。
6) David King（1983）：Wewak in Maps: Special Characteristics of Census Data, National Statistical Office, Research Monograph No. 2, 参照。
7) Mary Taylor Huber（1979）：Big Men and Partners—the Development of Urban Migrant Communities at Kreer Beach, Wewark, Yagl—Ambu 6. pp 39-49.
8) 1984年にヌイゴ集落で開始されたが，現在までウェワクではヌイゴのみである。
9) 1962年にウェワク総合病院（ボラム・ホスピタル）が，すぐそのあとにモエン陸軍兵舎が建てられている。
10) リバーピープルとも言われる。なおセピク川流域はアンゴラムより下流を下流部，アンブンティより上流を上流部，アンゴラムとアンブンティの間を中流部と一般に呼んでいる。
11) Richard Curtain and R. J. May（1979）：Wewak. IASER Monograph 12, pp 53-67.
12) 国営住宅公社とでも訳すのであろうか。
13) 筆者はラエの工科大学建築学科の故ラメッシュ・マナンダー博士から，氏を紹介された。氏はエルコム（Electlicity Commission）に勤務し，同時にヌイゴ集落のリーダーでもある。なお，マナンダー博士は，本年8月はじめ，カトマンズ郊外でおきた飛行機事故で亡くなられた。筆者はこの知らせを8月下旬，ブルーノ・カナウィ氏からの手紙により知らされ，大きな衝撃を受けた。
14) 当初，殺人容疑者がヌイゴ集落に逃げ込んだため，この捜索で調査ができない可能性があったが，のち，この事件がおさまり，日程の最終段階でヌイゴの調査が可能となった。
15) 所長の Mathew Narowen 氏，職員の Augustin Bali 氏，および Simon Kull 氏の3人の方々に，リーダーとの連絡や調査依頼，調査集落への往復の移動などで全面的な協力を得た。
16) ここでの1戸は1つの住宅をさすものとする。1住宅の中に何世帯が居住しているかはここでは問わない。
17) 前掲注5)と同じ。
18) Richard Jackson（1978）：The Growth, Nature and Future Prospects of lnformal Settlements in Papua New Guinea. Pacific Viewpoint pp. 22—41.
19) ここはもともと湿地帯であり，戦時中の爆弾によりできたクレーターなどが，今でも残っている。
20) 1991年の調査当時には1キナは約140円であった。
21) チャンブリ湖周辺の住民が製作する木製のお面で，黒色を基調とし，独特の模様や顔の表情がある。
22) カラフルなひもで編んだ手さげカバンで，実用あるいは観光みやげ品として売られている。
23) セビチンバースのリーダー，Mathew 氏からの聞きとりによる。